

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2603 号

Comparison of the Causes of Death Identified Using Automated Verbal Autopsy and Complete Autopsy among Brought-in-Dead Cases at a Tertiary Hospital in Sub-Saharan Africa

サハラ以南アフリカの3次病院における到着時死亡症例の自動口頭剖検並びに剖検による同定された死因の比較研究

横堀 雄太 (よこぼり ゆうた)

博士 (医学)

#### 論文内容の要旨

ザンビアの医療施設で記録される死亡の3分の1以上は到着時死亡であり、その死因は十分に分析されていない。このような到着時死亡に対し、先行研究にてコンピュータープログラムによる自動口頭剖検の使用により、病院が発行する死亡通知書よりも多くの到着時死亡症例の死因が特定されたと報告されている。しかし、自動口頭剖検で同定された死因の妥当性については、真の死因との比較によってまだ検討されていない。そのため本研究では、死因判定のゴールドスタンダードである剖検と自動口頭剖検による死因を比較し、自動口頭剖検の妥当性について検討するものである。方法は以下の通り。2019年9月から2020年1月にかけて、ザンビアの三次病院に搬入された13歳以上の全到着時死亡症例を本研究に登録した。外傷症例は除外した。故人の親族には、2016年世界保健機関の口頭剖検質問票を用いてインタビューを行った。データは自動口頭剖検プログラムの1つであるInterVA-5を用いて解析し、死因を決定し、剖検の結果と比較した。結果は以下の通り。到着時死亡症例50例の死因を同定した。InterVA-5の剖検による死因に対する陽性的中率は22%であった。3つの広義の疾病分類別におけるInterVA-5の死因判定陽性的中率は、産科関連では100%、非感染性疾患では27.5%、感染性疾患では5.3%であった。結論は以下の通り。到着時死亡症例の死因を決定するInterVA-5の陽性的中率は低かった。これは、口頭剖検面接の質やInterVA-5で利用可能な限られた死因カテゴリー、剖検術者による死因の記録方法等に起因すると思われる。また、50症例による研究であり、一般化が難しいことも本研究におけるリミテーションである。今後、陽性反応率を向上させるための介入を行い、より多くの症例数による研究を行うことで、自動口頭剖検のさらなる妥当性の検討を今後行っていく予定である。